

桜蔭俳話会 通信句会 (第九十九回 二十二年秋)

高得点句 自句自解

十四点④

虫時雨闇やわらかくなりけり 小川名みさ

夕食後の家事も終え、家族は自室に戻り、ようやく自分の時間になります。うつ伏せになり夜景をしばしながめ一日の疲れを癒す。そんな安らぎの時、闇の中から虫の音が聞こえてきて、句心を誘ってくれました。

十三点③

一病も話の種や夜長し 瀬戸 深水

老人会の温泉旅行で夜の宴もおひらきになり、それぞれの部屋に分散すると宴会疲れかしばらく静かになっていましたが、一人が医者に行つて来た話をきつかけとして次々腰の痛みやら内視鏡の検査やら、更にはボケまで話題となり賑やかでした。所が、今度は風呂へ入つて来るとか先に寝るよとかとなつて、いつしか秋の夜もすっかり更けておりました。

十一點②

秋深し己が余生を診る老医 平井 与史

うら淋しい秋も深まると、二つの不治の病を抱える身には、残る命の予想の範囲を医師の立場でつけてしまいます。その点、ある程度呆けるということは、天の与える恵みとも思えるのですが。

十点②

鉢物を移す軍手やそぞろ寒

鉢物も嘗ては多数やっていましたが、年と共に減らし手入れも楽になりました。気温も下がり、葉物に枯れが目立ち、寒ものも色づきましたので、菊をはじめ鑑賞を主体に日当たりや耐寒性を考慮しながら移動をしていると、しみじみ季節の移り変わりが身にしみて感ぜられました。

十点

大根干す岬の空を全開に 小川名梅乃

この一句を成した場所は、三浦半島東端の岬よりはるかに距離を置く大地。三浦半島

は東京湾に位置し、マグロ漁業、大根、西瓜の産地として広く知られている。この句を詠んだ高地より、明治時代に完成した日本最初の洋式灯台が望める。

一面の大根畑付近に一軒の家を囲むように大根が干されていた。外厨の水場には、土まみれの大根や冬菜等。太陽の念力を入れて干されている大根は、まるで砦のように感じた。この地に立てばおのずとはるかな沖へ視線はゆく。水平線に目を向けると沖から応えて寄せ来る白波。眼前に干し大根、彼方の岬の空は雲ひとつなく、まっ青に晴れて明るい初冬。空一枚の陽を独占する干し大根。昔の懐かしい風情が甦ってきて心ひかれのまま思わず詠んだ一句。

九点

ほしもののがらり乾きぬ 聴高音

岩野ヤエ子

今年の夏の暑さは異常で、夏が終わったと思ったら、冬の寒さが来て、「秋は無いのか」と残念に思っていました。その後、秋らしい日が戻ってきて嬉しくなりました。雲ひとつなく抜けるような青空、乾燥した空気。聴も晴れて乾いた日が好きなのか、そのような日には、決まって「キィー」と甲高い声で鳴きます。私も、そそくさと洗濯したり、押入れから物を出して干し物をします。夕方、カラッと乾いて取り込むときの満足した気持ちを句にしました。

七点

国旗掲ぐる家一つなし文化の日

平井 与史

文化の日(十一月三日)は戦前は明治節と言い、明治天皇の誕生日でした。戦後は祝祭日でも国旗を掲揚する家は少なくなりましたね。

六点②

鹿の声水車は水を歩かせて

野上 貞勝

わが本籍地敵島を旅行した時の作句。配合。鹿と水車の二物衝撃を旨に、鹿の別名(紅葉鳴)として島の紅葉山公園へのロープウェイ入口神宮裏の旅館万惣泊りて作句。昔日、水車は庭で漕いでいた風景。感傷したので水車の水の重ね詞とした写実句なり。

六点

つくづくと鳴き落蟬となりにけり

小川名みさ

今年の暑さにも負けず声を張り上げていた蟬も朝には落蟬になっていました。残る暑さの中でせつなく寂しい思いで蟬に語りかけました。

五点①

秋蝶の孤影たゆたう日射かな

瀬戸 溪水

今年は寒暖の差が極端ですが、或る日、寒さ続きの後、穏やかな日に一匹の蝶が連れも無く、菊の上や芝生の上を柔らかい日射しを浴びながらうっとりとして舞っていました。これを見て世は平和だなあと思いつつ現実の世界に思いを馳せた次第です。

五点①

寒露なり風呂の温度を二度上げる

野上 貞勝

上五句は現在は余りお目にかからない。温暖化により異常気象が激しい。酷暑から秋はなぐいきなり晩秋と身体不調になる。わが借老洞穴は生活に恐怖おり。ガス風呂の温度もそれに合わせて適温とする生活句。

五点

静峡の奇岩のあたり紅葉りぬ

藤本 友子

熊野川の静八丁を川下りした折の句です。清流の川岸には、亀岩、獅子岩、松茸岩などと名付けられた奇岩が次々と現れ目をひきます。その一つの奇岩を照らすかのような枝ぶりのよい紅葉がとても印象的でした。この句よって、熊野の旅のすばらしい思い出がよみがえります。

五点

夫の咳一つきこえて秋の夜

安沢 文枝

私の夫は、心房細動という病気をかかえています。血液の流れのために薬を飲んでいますが、その副作用のせいで咳がたくさん出ます。二階の自室にいる夫の咳は、居間にいる私には、夜昼なくとも気になります。深夜は特に。咳を少なくする薬をと言いますが、昭和ひとけたは、「そうだね」「そうしようか」なかなか申しません。結婚五十年近くになる私の複雑な気持ちも秋の夜にこめて、その状態そのまま作句しました。